

「仕事ラクだ」と

「仕事がおもしろい」は対立するか

雇用問題
コメンテーター
長嶋 俊三

◎高齢者と女性が労働市場のカギ

経済原則の第一は、豊かな人材をいかに活用するかである。効率的でもある。少子化により若い労働力が減少しているなか、高齢者と女性が労働市場に確保していくかがカギとなる。1月に発表された労働力人口の推計では、

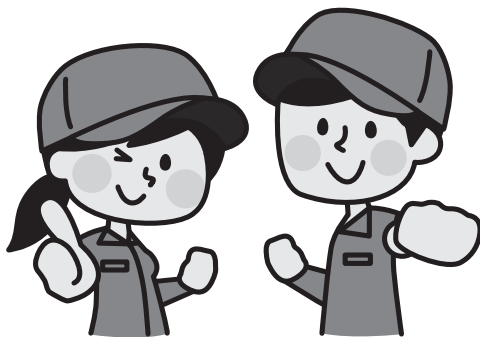
現状でも高齢者、女性の参加が想定以上に進んでいることが裏づけられた。さらに2040年の推計でも、労働力率上昇のカギは高齢者と女性にあるとしている。大量生産型の社会では、作業効率に追いつかない高齢者、女性は御荷物視されたが、多様なニーズに対応する品質の高い商品を生産する成熟社会では、高齢者の知識、経験が活かされるし、多様な働き方が整備されるなかでの女性の進出は当然のことだ。問題は、その能力と意欲をいかに引き出せるかにある。仕事をいかにおもしろく、働き甲斐あるものにするかは、

もともとは大量生産時代の若い労働者のテーマだったが、時代が変わって高齢者のテーマになり、その解決策が働き方改革の大きなヒントになってきた。

◎ラクな仕事とおもしろい仕事は

反比例

東京都下の空調機の部品メーカーでその問題がおこった。従業員1000人



の会社で、10人ほどの中高年主婦パートがいる。パートとはいえ金属部品の曲げ加工、切断、穴あけ作業など、自動機を操作しての貴重な戦力である。その女性パートから「仕事が面白くない」と不満が訴えられたのである。会社は、高齢者と女性に対応するため、現場ではラクに、効率的に、ミスなく作業ができるように職場改善をおこなってきた。「仕事が面白くない」という女性の訴えはそれを覆すものだった。

じつはラクに仕事ができる職場改善には落とし穴がある。最近の現場はすべて自動機が導入され、ポカよけ対策としてのセンサーなどがつけられているが、人の判断機能を取り去ることで効率的にはなるが、仕事の面白さはない。仕事の面白さは、作業者が自由に判断できるかどうか、にある。これを発端にこの会社では、座り作業が本当

に疲れないのかということを含めて見直しを行い、一人の女性従業員が数工程を担当する多台持ち、多工程持ち改善で、面白さを追求した。

◎人の顔が見える働き方改革が不可欠

兵庫県の機械メーカーでは、ラインのスピードに追いつかない高齢者の作業をラインからはずし、隣接のスペースに、作業者の歩行距離を短くするために数工程の機械を円形に配置し、しかも作業者のスピードに合わせて速度を切り替えられるように改善して、仕事のやりがい追求した。いずれの事例も、経営者のわがままと従業員のわがままをうまく融合させて仕事の面白さを実現しているが、その先にみえるものは、人の顔である。

《筆者紹介》

長嶋俊三（ながしま しゅんぞう）
1947年生まれ。明治大学卒。新聞記者、TVディレクターを経て、79年より（財）高齢者雇用開発協会発行の月刊誌『エルダー』の編集を創刊から担当。2011年6月、独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構を退職。著書に『60歳からの仕事』（清家篤慶應義塾大学教授と共著、講談社刊）、『エリレス就業社会』（共著、日本能率協会マネジメントセンター刊）などがある。